18 世紀南アジアにおけるイスラーム改革運動

—シャー・ワリーウッラーの思想と実践に着目して—

平成 21 年入学
派遣先国：インド共和国、パキスタン・イスラム共和国
石田　友梨

キーワード：霊魂論、思想史、政治哲学、イスラーム改革運動、南アジア

対象とする問題の概要

本研究が対象とする問題は、18 世紀南アジアにおけるイスラーム改革運動の政治哲学である。1703 年、インドに生まれたシャー・ワリーウッラーは、当地のムスリムたちに広まっていたヒンドゥー的習俗に対する批判を行った。聖典クルアーンへの回帰を訴えた彼の著作は、イスラームにおける先駆的な改革理論として位置付けられている。

イスラーム改革運動において従来注目されてきたのは、同時代人であり、同じくイスラーム改革運動家であったアブドゥルワッハーブの思想である。彼は、スーフィズム（イスラーム神秘主義）や聖者信仰を否定した。これに対し、ワリーウッラーは、彼自身が神秘家であった。彼の政治理論の中心は、個人の霊魂の段階に応じ、社会も段階的に発展するというものである。ワリーウッラーの思想は、スーフィズムとギリシア哲学の流れを受け継ぐものであると言えよう。

研究目的

本研究の目的は、スーフィズムの修行の延長線上に、ワリーウッラーの政治実践を位置付けることである。このことにより、イスラーム改革運動に対する新しい視点を提示することができる。そのためには、スーフィズムの霊魂論に関するワリーウッラーの著作を研究する必要がある。しかし、日本においてはワリーウッラーの著作を入手することが困難であった。

上記の理由により、今回のフィールドワークの目的を資料収集とした。博士論文に用いる予定であるワリーウッラーの著書、*Alṭaf al-quds* と *Tafhīmāt ilāhīya* の 2 点をはじめとし、ワリーウッラーの著作を可能な限り収集した。現地における、ワリーウッラーに関する研究書の調査と資料収集も行った。

インドではデリーとアリーガルを調査地とし、パキスタンではラホールとイスラマバードを調査地とした。各地の大学図書館、書店、ワリーウッラー縁の地を中心に、資料収集を行った。

フィールドワークから得られた知見について

以下、フィールドワークの日程に沿って得られた知見を記述する。

・2011 年 9 月 5 日～9 日：アリーガル（インド）

南アジア最大規模のペルシア語文献所蔵数を誇る Maulana Azad Library（Aligarh Muslim University）において、文献調査を行った。

Alṭaf al-quds の刊本を電子媒体で入手した。続いて、*Tafhīmāt ilāhīya* の写本を 5 点発見し、写本毎の構成の違いなどを調査した。同書の二種類の刊本と各写本とのテクストの相違について、詳細な調査が必

要であったが、日程の都合から断念せざるを得なかった。当館が所蔵する全写本は、数年後に Web 上で公開されるとのことであるが、現時点では手記以外の記録方法は認められていない。ワリーウッラーの著作の写本に関しては、アラビア語とペルシア語の文献目録を電子媒体にて記録した。

また、Publishing Division においては、当大学出版のワリーウッラーに関する文献を 3 点購入した。

（写真 1）アウラングゼーブ帝の剣を披露する、Manuscripts Division の所長。

・9 日～14 日：デリー（インド）

デリー大学とジャーミア・ミッリーヤ・イスラミーヤ学院の図書館にて、アラビア語とペルシア語の文献調査を行った。

日程に余裕ができたため、ワリーウッラーの出生地デリーにある、彼の墓廟を訪れた。付属のマドラサを案内してもらう機会を得て、当マドラサが発行するワリーウッラーに関するウルドゥー語文献を 3 点購入した。

（写真 2）一番手前がワリーウッラーの墓。日に百人ほどが参詣に訪れるという。

さらに、学院設立の趣意書にワリーウッラーの思想を継承していることを謳う、デーオバンド学院を訪れた。当院の図書館を調査し、ワリーウッラーの著作が所蔵されていることを確認した。

（写真 3）デーオバンド学院の図書館には、18 万 4 千冊の文献が所蔵されている。

・14 日～18 日：ラホール（パキスタン）
パンジャーブ大学にて、*Tafhīmāt* の未入手の刊本を複写した。
・18 日～21 日：イスラマバード（パキスタン）
国際イスラーム大学の Dr. Muhammad Hamid-Ullah library にて、ワリーウッラーに関する未入手の研究書を複写した。また、出版部が発行する、ワリーウッラーに関する英語文献を 4 点購入した。

今後の展開・反省点

出版地を直接訪れることにより、日本では入手できなかったワリーウッラーの著作や、関連する研究書を多数収集することができた。しかし、アラビア語やペルシア語が現在当地で通用していないせいか、原典の刊本自体は販売されていなかった。そのため、図書館が所蔵している刊本を複写せざるを得なかった。これと関連し、ワリーウッラーを対象とした現地の研究書のほとんどが、ウルドゥー語で書かれていることが明らかとなった。原典分析を終えた後、現代までの思想の継承を考察するためには、ウルドゥー語の習得が新たに必要となるだろう。

反省点として挙げられるのは、日程調整に柔軟性を欠いたことである。実際に現地に行くことで、事前の調査からは予想もできない発見をすることがある。Maulana Azad Library の写本やデーオバンド学院については、他の都市の調査を削ってでも、時間をかけて調査すべきであった。